研究・調査報告書

報告書番号	担当
１８４	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門

題名（原題／訳）

Ex-drinking may be a surrogate for unmeasured risk factors for upper gastrointestinal bleeding: reappraisal and an additional survey of subjects from a case-control study in Japan

過剰飲酒が未知の上部消化管出血の危険因子となる可能性：日本における症例対照研究の再評価と追加解析

執筆者

Watanabe H, Kamijima Y, Sato T, Kaufman DW, Kubota K.

掲載誌（番号又は発行年月日）

Eur J Epidemiol. 2009;24(3):143-7. Epub 2009 Feb 11.

キーワード

飲酒、症例対照研究、データ収集、消化管出血、ヘリコバクター・ピロリ、NSAIDs

要　旨

目的：

非ステロイド抗炎症薬(NSAIDs)と上部消化管出血に関する我々の最近の症例対照研究では、上部消化管出血のリスクは大酒家より飲まない人のほうがリスクが高かった。この予期せぬ結果を検討すべく、飲まない人が上部消化管出血のリスクを有するのかを調べるためにデータの再解析を行い、我々の先行研究に情報バイアスもたらすかもしれない相違点を見つけるために追加調査を行った。

方法：

この再解析においては先行研究で飲まない人とした183人を過去飲酒者39人と飲んだことの無い人144人に分け、上部消化管出血のオッズ比を推定した。さらに対照群の潜在的な上部消化管出血の有病率を推定した。新研究では以前の飲酒歴に関する自己記入式質問紙を送った。

結果：

再解析では過去飲酒者のオッズ比は5.4と高く、飲んだことの無い人のオッズ比は2.6と我々の先行研究の飲まない人のオッズ比3.2より低かった。過去飲酒者はH.ピロリ菌の有病率が高く、潰瘍の既往歴と胃腸薬の使用歴が他の群より高かった。飲酒歴に関する回答は先行研究と新研究合わせて、症例群でκ=0.74、対照群でκ=0.73であった。

結論：

過去飲酒者は診断されていない潰瘍のような上部消化管出血の未知の危険因子を有するかもしれない。上部消化管出血に関する観察研究から、消化管出血の潜在的なリスクに関し、過去飲酒者は飲んだことがない人と峻別されるかもしれない。臨床において過去飲酒者にNSAIDを処方する際にはその過去飲酒者に潰瘍の既往が無いか確認すべきであろう。